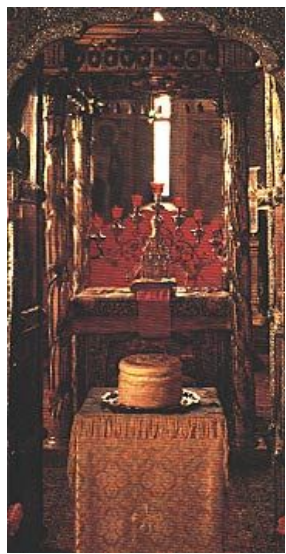


「アルトス」について



▲ 光明週間の間、聖堂の升壇に安置されているアルトス(ロシア)

「アルトス」という言葉は、もともと「発酵させたパン」を意味するギリシャ語です。

正教会では、復活祭の夜の聖体礼儀(升壇外の祝文の後)で成聖される大きな聖パンのことを「アルトス」と言います。

函館正教会でも毎年、升壇の上に「アルトス」のための特別なアナロイを置き、管轄司祭がアナロイ上の「アルトス」を聖水で成聖します。「アルトス」を成聖する際に、神父は炉儀を行ない、成聖のための特別な祈祷文を読みながら、聖水をかけて成聖します。「アルトス」はその後一週間(光明週間の間)、そのまま升壇の上に置かれています。その位置は、イコノスタスの主ハリストスのイコンの前です。

「アルトス」の起源には、次のような経緯がありま

す。

主ハリストスの復活の後40日目に、主ハリストスが昇天した後、使徒たちは聖体礼儀を行なう際に、今は既に目に見えない形で存在している主ハリストスがかつて居られた首座の席に常にパンを置いていたのです。その後、時代が下ってからも、教会は、当時の使徒たちの行いに倣い、私たちの命のパンとされた救世主のシンボルとして、復活祭に聖堂にパンを安置することを決めました。

ロシアでは、光明週間の期間、毎日、聖体礼儀の後に「アルトス」を掲げて

十字行を行ないます。光明週間の土曜日になると、聖体礼儀の中で(升壇外の祝文の後)、神父が「アルトス」を切り分けるための祝文を読み、切り分けられた「アルトス」は、聖体礼儀の十字架接吻の時に、参拝者に渡されます。奉神礼規則で、このように定められているのです。

教会で頂いた「アルトス」の切り分けられた小片は、各家庭に持ち帰り、祭壇のイコンのところに置きます。肉体的に、または精神的に具合が悪い時に、小さく削って聖水と共に頂きます。一年間に一片しかない分量ですから特別に主・神の助けを必要と感ずる時に頂きます。頂くときには「ハリストス復活！」と唱えます。

前述の「アルトス」の起源でみたように、「アルトス」は主ハリストスのシンボルですから、小さな屑まで大事に口に入れます。払い落としたり、床に落としたままにしないように気をつけましょう。

※アルトスを長持ちさせるためには、まずしっかり乾燥させましょう。乾燥しないうちに冷蔵庫やビニール袋に入れると、カビの原因となります。

※「アルトス」の表面に上に押す印は、通常「十字架(イバラの冠のみが描かれ、主ハリストスの体が描かれていないもの)」または「主ハリストスの復活」の図です。

ブラヴォスラーヴナヤ エンツィクロペーヂヤ

◎参考文献：「正教百科事典 (Православная энциклопедия)」。